

電話の佐藤さんは悩殺ボイス

目次

電話の佐藤さんは悩殺ボイス

5

番外編 プライベートの佐藤さんに一途な恋しています！

199

電話の佐藤さんは悩殺ボイス

第一章

（さあて、今からは私のご褒美タイムだ！）

毎週金曜日の昼休憩に入る五分前。この時間は、私にとって待ちに待った時間だ。

手元には受注用の書類、ボールペン、メモ帳を置く。準備オッケ、拔かりなし。

私は、ワクワクする気持ちを抑えながら電話の受話器を取る。

すでに暗記している電話番号をゆつくりとプッシュしていくのだが、ドキドキすぎて手が震えてしまう。

もう少しで待ち焦がれていた“あのお方の声”を聞くことができる。そう思うだけで、興奮してしまうのだ。

「きやああああ！」と叫んで飛び跳ねたい気持ちをグッと堪える。なんとと言ってもここは会社、私は社会人。TPOはわきまえていますよ、はい。

私は吉岡奈緒子、二十五歳。目はクリッと丸く、背丈は百五十五センチで小柄な体形だ。

肩先で揺れる長さの髪は、一度もカラーリングしたことがなく艶やかで真っ黒。この髪だけは、胸を張ってチャームポイントだと言える箇所である。

その一方、この幼く見える容姿のせいで、未だに高校生と間違われるのが難点。

なのに、声だけは落ち着いて聞こえるらしく、声と実物のギャップが激しいとよく言われてしまう。

それが原因なのか、ただ単にモテないだけなのかわからないが、未だに彼氏と呼べる人がいたためしがない。年齢は彼氏いない歴という、あまりめでたくはない記録を伸ばしている真っ最中だ。

大学を卒業後、外食産業向けデザート製造販売に力をいれている金本スイーツに入社し、営業部に配属されて三年が経った。

営業事務として書類作成やデータ入力、電話での受発注に対応するのが主な仕事である。

そんな私にとっての“ご褒美”とは、AMBコーポレーション国内物流部にいる佐藤さんという男性の声を聞くことなのだ。

AMBコーポレーションは大手食品流通会社で、外食産業をはじめ、ホテルなどにも仲介企業として商品を卸している。最近では社員食堂や学校給食関連とも取引があるようだ。

金本スイーツとしては、AMBコーポレーションは大きな利益を生む大事な取引先だ。

注文数も多いので、受注時には他よりも神経を使う。

浮かれている場合じゃないことはわかっているけれど、頬が緩んでしまうのは許してほしい。

佐藤さんの声は、フェロモンダ漏れ——大人の男性の魅力を存分に味わえる、ステキ過ぎる声なのである。その上、紳士的で優しい言葉遣いなので、人柄にもときめいてしまう。

元々、紳士的で王子様のような男性が理想のタイプだった私は、初めて佐藤さんの声を聞いたと

き、「本物の王子様みたい!」と、感動したものだ。

佐藤さんのファンは、私だけじゃないと思っている。きっと世の女性たちを腰砕けにしているに違いない。本当に恐るべしだ。

高まる気持ちを感じながらコール音を聞いていると、A M Bコーポレーション国内物流部へと電話が繋がる。

(ご褒美タイムの始まり、始まりだ!)

私は背筋をピンと伸ばし、よそ行き声を出す。

「いつもお世話になっております。金本スイーツの吉岡です。国内物流部第一課、佐藤さまはいらっしゃいますでしょうか?」

『少々お待ちください』という女性社員の言葉のあと、保留メロディーが流れる。この間に浮き足立っている心を落ち着かせるため、唇をキュッと横に引く。

今までに何度も佐藤さんと電話をしているのに、未だに魅力的な声に慣れない。だからこそ、胸の鼓動が静まらないどころか、ますます高鳴ってしまうのだ。

プツリと保留メロディーが止まる。そのあと聞こえてくるのは、今だけの私の王子様の声。

『お待たせいたしました。吉岡さん、いつもお世話になっております、佐藤です』

その第一声に、私の身体は電流がビビビッと走るような衝撃を感じた。

(やっぱり、いい。すっごく、いい!)

思わず感嘆のため息が零れてしまいそうになる。ボイスレコーダーにでも録音して、何度も繰り返す。

返し聞いていたい。

いや、待て待て、今は仕事 중이다。ボーツとしている暇などない。

私は、すぐに我に返って挨拶をした。

「こちらこそ、お世話になっております」

電話の先にいる佐藤さんには見えないのに、私は受話器を握り締めてペコペコと頭を下げる。

これって“電話あるある”だと思う。会社員なら、誰もが取引先との電話でやったことがあるはずだ。

それがなんだかおかしくて口元が緩みそうになるものの、今はきちんと仕事をせねばとグツと堪える。

「先ほど佐藤さん宛てにファックスを送らせていただきました。お手元に届きましたでしょうか?」

『はい、ありがとうございます。これは……以前いただいたパンフレットの商品発注用紙ですね?』

「はい、そうです。来週より手配ができるようになりますので、お知らせさせていただきました」

『わかりました。では、こちらは社内で検討させていただきますね』

佐藤さんは安定の美声で『この件については後日連絡させていただきます』と続ける。

ああ、もう止めて。こんなにセクシーで大人な色気を振りまく声を聞いたら、蕩けてしまっただけで仕事にならない。

彼は何も悪くないのに、心の中で八つ当たりをしてしまう。ああ、佐藤さんはなんて罪作りな人なんだ。

頬が緩んでしまいそうな自分を叱咤していると、再び美声が私の耳をくすぐってくる。

『では、今週の発注なのですが……よろしいでしょうか？』

「はい、承ります」

気持ちを切り替えて、仕事に集中しなくては。

基本、注文はファックスかメールを送ってもらうのだが、完全受注生産商品のみ電話でも受注している。

なんでもシティホテルに卸すものらしく、顧客からの要望が細かい。だからこそ電話での相談が必要になってくる。今日も細かい指示が入り、それをすべて受注用紙にメモしていく。

『以上となります。一気に色々話してしまいましたが、大丈夫ですか？ 吉岡さん』

「お気遣いありがとうございます、大丈夫です。ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

抜け落ちがないかメモを確認したあと、電話先の佐藤さんに問いかける。

『はい。今の内容は、あとでメールもさせていただきますね。そちらも確認をお願いします』

「かしこまりました。よろしくお願いします。では、また来週、この時間にお電話させていただきます」

『はい、お願いします。失礼いたします』

「失礼いたします」

これで私のご褒美タイムは終了だ。

ゆつくりと受話器を置いてから、うつとりとしたため息をつく。

今日も、電話の佐藤さんはステキ過ぎた。王子様の名に恥じない極上な声だった。

（はあー、ステキ。どうして佐藤さんはあんなに格好いい声なんだろう）

会ったことがない声だけの付き合いなのに、ここまで陶醉するのはおかしいだろうか。

自分でもその辺りは突っ込みをいれたいぐらいだ。

私の経験から、声の印象と本人の性格は一致しないと思っている。今までも電話の相手を想像したことがあるが、実際にその相手と会っている部の営業マンからは、イメージとかけ離れた人物像を聞いてばかりだ。

だけど、佐藤さんだけは特別。絶対にリアル佐藤さんもステキな人のはず。私の期待通りの王子様に違いない、と信じて止まない。

佐藤さんとの電話は金曜日のみ。私が彼と電話する日をどれほど待ち焦がれているか。またあと一週間も声を聞くことができないのかと思うと寂しくなってしまう。

「ほう……」と何度目かわからぬため息を零していると、誰かが私の肩にポンと触れた。

慌てて振り返ると、そこには外回りを終えて戻ってきた渡部さんが、ニヤニヤと笑って立っている。

「お疲れ様です。どうしたんですか？」

「どうした、は俺が言いたいんだけどな」

クツクツと笑いを囁み殺すように肩を震わせている渡部さんは、ぽっちゃり体形の男性だ。

見た目は、可愛らしくまのキャラクターを彷彿とさせる容姿をしているが、中身は兄貴肌で営業部一の成績を誇る営業マンである。

私より五つ年上で、後輩である私を何かと気遣ってくれる優しい先輩だ。

そんな渡部さんは、あの「佐藤さんがいるAMBコーポレーションの営業担当だ。」

以前、渡部さんに佐藤さんのことを聞いたことがあるが、『内緒。会ってみればわかるよ』とニヤニヤ笑うだけで詳しいことは教えてくれなかった。

私が佐藤さんの声に陶醉していることを知っていて意地悪するのだ。会えないからこそ教えてもらいたいのに。渡部さんのいけず。

ただ、しぶとく聞き続けて得た情報によると、佐藤さんはやっぱりイケメンだとか。

ああ、一度会ってみたい。いつそ遠目でいいから拝んでみたいなあ。

前にそんなことを言ったら『遠目で拝むって……間近で挨拶しろよ』と渡部さんに呆れられてしまった。でも、憧れの人物を目の前にして、冷静でいられる自信はない。

私は、未だに肩を震わせて笑っている渡部さんを白けた目で見つめる。

冷たい視線を感じ取った渡部さんは、笑いを無理矢理抑えながら、もう一度私の肩をポンと叩いた。

「受注の電話で幸せそうな顔をするのは、お前ぐらいだぞ。吉岡」

「うっ……」

どうやら先ほどの一部始終を見られていたようだ。私がギクリと肩を震わせると、渡部さんは訳

知り顔でニヤニヤと笑う。

「その様子だと、AMBコーポレーションの佐藤さんと話していたんだろう？」

すべてお見通しらしい。グツと押し黙る私と再び笑い出した渡部さんを見て、隣の席に座る同期、遠野保奈美が呆れ顔で話に入ってきた。

「ちよつと、奈緒子。アンタ、やっぱり佐藤さんに恋しちゃっているんじゃない？」

「そんなことないよ！ステキだなあって思っているだけだよ？」

私は手を組んで夢見がちに言うのと、すぐに保奈美から反論の言葉を投げつけられる。

「電話の佐藤さんに憧れすぎて現実の男に目を向けることができずにいるくせに、よく言うわよ。そんなことだから未だに恋人ができないのよ」

「うー、それはその……縁がなかっただけだし！」

「縁がないんじゃないかって、奈緒子が自分から遠ざかっているんでしょ？」

保奈美が手厳しいのには理由がある。私が合コンのお誘いをずっと断っているからだ。

元々合コンにいい思い出がないので、単に行きたくないだけなんだけど、保奈美には疑われている。私が佐藤さんのことを好きだから、合コンに参加しないのだと。

別に佐藤さんとうにかなりたいたいなんて思っていない。

私は本心から、ステキな人だなあと憧れているだけだ。

それに、万が一、私が抱いている感情が恋というヤツだったとして、何か不都合があるというのか。

渡部さんと保奈美に憤慨^{ふんがい}して言うと、二人は顔を見合わせてから盛大にため息をついた。

「確かに佐藤さんは生身の人間だけどさ。奈緒子がしていること、考えていることは二次元のヒーローに憧れを抱いているのと一緒じゃない。佐藤さんは実在しているんだから、憧れだけじゃなくて一步踏み込んでみなよ」

「別にいいでしょ！ 佐藤さんと付き合いたいなんて思っていないし」

確かに保奈美が言う通り、私の中の佐藤さんは、アニメや漫画のヒーローとあまり変わらないのかもしれない。

どこかで、憧れだけで終わらせたいと思っている自分がいるのだ。

電話の声からイメージしていた人物像と本人は、全然違うことも多々ある。

佐藤さんに夢を見て、キアキア言ってさわいでいるうちが華ということだってあるからだ。だけど、どんな人なのか会ってみたい、仕事から離れて話してみたい、そんなふうに思っていることも確かだ。全くもって面倒くさい女心である。

頭の片隅であれこれ考えていると、渡部さんはニヤツと楽しげに笑った。

「遠野が言うことも一理あるな」

「渡部さんまで、そんなこと！ いいんです。憧れは憧れのまま。想いはキレイなままがいいんですよ」

「そんなこと言って現実の男に目を向けないようじゃ、いつまで経っても嫁には行けないぞ？」

「渡部さん、それセクハラですよ！」

「何を言う。親心だ」

胸を張って言い切る渡部さんを見て力が抜ける。いつから貴方は私の親になったんですか。ガツクリと項垂^{うなだ}れる私に、渡部さんは神妙な顔をして言う。

「吉岡、お前いくつになった？」

「ちよつと、渡部さん！ 女性に年齢を聞くのは失礼にあたりますよ」

「大丈夫、俺とお前の仲だ。で？ 何歳になったんだ？」

隠したところで入社年数で計算すれば、私の年齢などすぐにわかる。

渋々口にする、渡部さんは「ふむ……」と考え込む仕草をした。

「吉岡さ、営業部でやった花見のときに言っていたよな。恋人いない歴は年齢と一緒だって」
「……」

酔ってそんなことを言っていたのか、私は。花見のときの自分を殴り飛ばしたい。

実姉は来月に結婚式を挙げるというのに、私ときたら男性と付き合ったことがないなんて。姉妹間の格差がありすぎて泣けてきてしまう。

しみりしている私を横目に、渡部さんはしみじみと呟く。

「これから一つ、吉岡の妄想癖^{もうそうへき}を直して、現実の男に目を向けさせることが必要だと思うんだよ、俺は」

「余計なお世話です」とブーブー文句を言い続けると、渡部さんは人の悪そうな笑みを浮かべた。イヤな予感しかなくて、私は身震いをする。

「と、言うことで。吉岡に朗報だ」

「あまり内容を聞きたくはないんですが……」

そそくさと逃げだそうとする私の退路を、渡部さんのふくよかな身体が塞ぐ。

思わず眉を顰めると、渡部さんは不敵な表情で言った。

「実は、A M B コーポレーションの国内物流部の仲間内で、今度デイキャンプをするんだってさ」

「は、はあ」

訝しげに頷く私に、渡部さんはフンと含み笑いをした。

「で、そのデイキャンプ、俺も声かけられているんだ。吉岡、お前も一緒に行かないか？」

「え……ええ!？」

思わず叫んでしまい、慌てて手で口を押さえる。

「ただ、国内物流部のメンツだとは聞いているんだけど、佐藤さんが来るかどうかはわからないんだ」

「……」

「それでも行ってみる価値はあると思う。どうする、吉岡。興味はあるだろう？ 佐藤さんに会えるかもしれないチャンスだぞ？」

確かにチャンスかもしれない。

こうして電話で話すだけの関係だ。このままなら一生想像するだけ、憧れるだけになってしまっただろう。それでも構わないと思うけど……興味があるのも事実だ。

だけど、会わない方が幸せだったということになるかもしれない。

両極端の気持ちをつ天秤にかけて、最終的には好奇心に負けた。

「……行ってみたいかもです」

なんとも曖昧な返事をした私を尻目に、渡部さんは早速動き出してしまった。

「じゃ、幹事をする先輩に連絡しておく」

「せ、先輩？」

「そう。実はA M B コーポレーション国内物流部に、高校のときの先輩が勤めていてさ。今回俺を誘ってくれたのはその縁でもあるんだ」

サクサクと計画が進められていくのを、ただ啞然として見つめてしまう。渡部さん、だてに我が社ナンバーワン営業マンじゃないな。

「うちの女子社員にも声かけてこいって言われていたからちようどいい。助かったなあ」

なんだか嵌められた感じは拭えないが、電話でしか話したことのない佐藤さんに会うのは楽しみでもある。もちろん怖い気持ちもあるのだけど……

（間近で佐藤さんの声を聞けるチャンスかもしれないんだ……こんな機会、二度と巡ってこないよね）

私はギュッと拳を握り締め、佐藤さんとの対面に心を躍らせた。

今日は待ちに待った、AMBコーポレーション国内物流部の人たちとデイキャンプだ。

私はこの日のために、色々と準備をしてきた。

なんと言っても、憧れの佐藤さんにご対面するかもしれないのだ。気合いが入るといふものがある。

もう一度自身の格好をチェックして、抜かりはないかと目を光らせた。

黄色の花がプリントされているシフォン生地 of 白色チュニックに、膝上十センチ丈のキュロット、足下は白のレースが可愛いストラップサンダル。今日は可愛い路線でコーディネートしてみた。

だけど、チュニックは背伸びをし、肩に入ったスリットから動いた時に肌が見えるような、セクシーなデザインを選んだ。

憧れの王子様、佐藤さんに少しでも「金本スイーツの吉岡は可愛い子だった」と思わせたい。その一心で選んだ服だが、果たして彼の目にはどのように映るのだろうか。

意気揚々と今日を迎えた私は、金本スイーツ近くにある地下鉄の駅で渡部さんと待ち合わせした。なんでも主催者である渡部さんの先輩が車を出してくれるらしく、そこに便乗させてもらうことにしたのだ。

車に揺られること一時間半。ようやく目的地のキャンプ場に着いた。

そこはファミリーや私たちのように社会人グループで来ている人たちもいて、かなり賑わっている。

今回借りたのはデイキャンプ専用の区画で、近くに小川が流れていてロケーションも最高だ。

しばらくして参加メンバー全員が集まったので、まずは自己紹介をという流れになる。

と、言っても私だけが新参者なので、トップバッターは私だ。

「いつもお世話になっております。金本スイーツの吉岡奈緒子です。今日はお邪魔させていただきました」

ペコリと頭を下げると、温かい拍手に包まれる。ホッと顔を上げた瞬間、一人の男性と目が合った。

(あ……すぐ背が高い。それに、格好いい！)

緩くウェーブがかかった黒髪、百八十センチ以上はあるかと思われる背丈、一見スラリとした体格なのにバランス良く筋肉が付いている。肌が少し小麦色で、お日様の下がとてもよく似合う人だと思った。それにワイルド系な風貌で、大人の色気を感じる。

そのあと参加者の自己紹介は続いたけれど、私はそのステキな男性から目が離せなくなってしまう。

すると、彼が近くにいた女性に声をかけた。

「暑さで体調が悪くなったか？ 少し待っていてよ」

そう言って、その男性は手慣れた様子でタープと呼ばれる日よけを広げ、女性陣に声をかけた。

「日差しが強いから、タープの下に移動して」

確かに今日は日差しが強くて、日傘が欲しいと思っていたほどだ。周りの女性陣も同じことを考えていたのだろう、口々にお礼を言っている。

さらに、女性陣が移動している最中、具合が悪そうな女性をその男性はさりげなく助けていた。それを見て、とても優しい人だなと胸がキュンと高鳴る。

私とその男性に見入っていると、「おい、佐藤。自己紹介、お前の番だぞ」と周りの男性陣が彼に声をかけた。

今、佐藤と言わなかっただろうか。目を丸くして、その男性を見つめると、彼は私に軽く頭を下げた。

「佐藤だ。よろしく」

「おい、それだけかよ。佐藤は相変わらずだなあ」

渡部さんの先輩が、豪快に笑って佐藤さんの肩をバシバシと叩いた。一方の佐藤さんは、迷惑そうに眉を顰^{ひそ}めている。

不機嫌な様子の彼を見かね、渡部さんの先輩が代わりに紹介をし始めた。

「佐藤亮哉^{りょうや}、三十三歳。独身で彼女は今、いなかったよな？」

ジトツとした目で先輩を見ながら、佐藤さんは小さく頷く。

その様子を見て肩を竦^{すく}めたあと、その先輩は「これで今回のメンツは以上です！」と言って、陽気に笑った。

このステキな男性が「電話の佐藤さん」だったなんて、ビックリしてしまった。

私が想像していた佐藤さんとは少しイメージが違っていたけど、格好いいものは格好いい。渡部さん情報は間違っていないかったということだ。

そのあとは、各自バーベキューの準備に取りかかった。私もお手伝いをしながら、チラチラと佐藤さんを盗み見る。

最初は、佐藤さんってどんな人なんだろう、と期待して様子を窺^{うかが}っていた。

けれど、観察を続けたこの小一時間で、彼に対してどこか威圧的というか、怖そうというイメージが出来上がりつつあった。

例えば、道具をうまく使えず困っている人がいたとき。

「それはこつちだ。ったく、しょうがないな。貸してみろ」

と、ぶっきらぼうな態度で言って、佐藤さんが代わりに作業をし始めた。それに男性数名と話しているときも、紳士とは程遠い口ぶりだ。

まさかあの佐藤さんが、そんな口調で話すなんて想像もしていなかった。

電話での彼は丁寧な口調で優しいげな雰囲気なのに対し、プライベートではよく言えば男っぽい、悪く言えば荒っぽい言葉遣いなのだ。

電話での話し方が佐藤さんの常^{つね}だと思っていた私にしてみたら、ビックリしたなんてものじゃない。

もちろん、普段は仕事なのだから、取引先に対して丁寧な口調で話すのは当たり前だろう。だか

ら、佐藤さんが悪いわけじゃない。彼は常識的なことをしているだけだ。ただ、あまりにもオンとオフのギャップがあり過ぎる。

私の中の、男の色気たっぷりで紳士的な王子様というイメージが音を立てて崩れた。代わりに、威圧的な男性という印象に塗りかわっていく。

(やっぱり懂れで終わらせる方がよかったんだ……)

少なからずショックを受けてしまった私は、無意識に人の輪から少し離れる。

懂れていた紳士的な王子様が、実は言葉遣いが荒っぽい男性だったなんて。

確かに実物の佐藤さんも格好よかったし、女性陣にさりげない優しさを見せていた。だけど、まとう雰囲気の違いすぎて、そのギャップに戸惑ってしまう。

フラフラと足元がおぼつかないまま、気がつけば鉄製の網を置いた火元のそばまでやってきていた。

パチパチと木が爆ぜる音を聞きながら、呆然と火を見つめる。すると、急に「おい」という呼びかけとともに、肩を掴まれた。

驚いて振り向いた先には佐藤さんがいて、私は目を丸くする。

そんな私を、佐藤さんはギロリと眼光鋭く睨みつけてきた。

「そんなところにいると危ない」

「えっ！」

電話の佐藤さんなら、もっと紳士的な態度かつ、優しい口調で話してくれるはずだ。

だけど、プライベートの佐藤さんの口調は鋭い。

未だに電話時と現実のギャップで呆気に取られていると、彼は五百ミリリットルのお茶のペットボトルを手渡してきた。

「それ持って向こうへ行け。ここには来るな」

「……っ！」

(そんな言い方しなくてもいいのに……)

思わず不平不満が表情に出てしまいそうになるのを、グッと抑える。

今日はA M Bコーポレーション国内物流部の皆さん、そして渡部さんの厚意で参加させてもらったのだ。ここで私が空気を悪くするわけにはいかない。

落ち着け、と自分に言い聞かせていると、佐藤さんは無表情のまま着ていたウインドブレーカーを脱ぎだした。

そしてそのウインドブレーカーを私の頭に被せてきたのだ。

私は慌ててウインドブレーカーを頭から取ったあと、佐藤さんを見つめる。

だが、彼は私の視線から顔を背けて、相変わらず威圧的に呟いた。

「煙臭くても我慢しろよ」

「えっと……？」

全く意味がわからない。彼のウインドブレーカーを腕に抱き、私はただ佐藤さんを見つめ続ける。困惑の色を隠せない私に対し、佐藤さんは未だに視線を逸らしたまま口を開いた。

「この時期の紫外線を舐めていると、痛い目に遭うぞ」

「え？ え？」

オロオロしている私に、彼はやつと視線を向けてきた。

口を真「文字」に引いたあと、佐藤さんは冷静な表情で私に指図する。

「それ、着ておけ」

「い、いいですね！」

フルフルと首を横に振り、手にしていたウインドブレーカーを返そうとすると、彼は有無を言わさないといった厳しい視線で私を見つめてきた。

「いいから黙って着てろ。そうしたらタープに行つて、茶でも飲んでな」

「っ！」

ピシヤリと言いのける佐藤さんは、近寄りがたい雰囲気醸し出している。

やがて佐藤さんは私に背を向け、焼き炭を柄の長いトングを使って並べ始めた。

その行動がなんだか私を拒絶しているように感じてしまう。

どうしようか、と戸惑いながら彼の背中を見つめる。

（確かに作業の邪魔だったかもしれないけど、言い方つてもものがあると思うのよね！）

先ほどの佐藤さんを思い出すと、どう考えても初対面の人に対する態度じゃないはずだ。

再びムツとした私だったが、感情を露わにすることはできない。

今日の私は、あくまで金本スイーツの人間として参加しているのだ。

それなのに何か問題を起こしたら……想像するだけで恐ろしい。

私はウインドブレーカーを握り締めたあと、背中を向けたままの佐藤さんに頭を下げた。

「わかりました。すみません」

そう言つて、皆さんがいるタープテントへと場所を移動した。

渡されたウインドブレーカーだが、佐藤さんに返そうとしたり、着ていなかったりすれば、再び

怒られる可能性大である。

それだけは勘弁だ。私は不満を覚えつつも、ウインドブレーカーを羽織った。

そのあとは少しづつAMBコーポレーションの人たちとも慣れて、デイキャンプを楽しむ。

時折佐藤さんに視線を送つては、イメージしていた王子様キャラじゃなかったと落胆するデイキャンプを終え、さて帰路につこうとしたときのこと。

「今日はお疲れさまでした。ありがとうございます」

AMBコーポレーションの皆さんにお礼と挨拶をしたあと、私は一台の車に恐る恐る乗り込む。なんと私一人だけ、佐藤さんが運転する車で送ってもらうことになってしまったのだ。

今朝は渡部さんと一緒に金本スイーツ近くの駅で乗せてもらったが、私の住んでいるマンションからは遠い場所にある。

そのことを渡部さんが幹事の人に話したところ、帰りはマンションの最寄り駅まで送ってもらうことになったのだ。

（だけど、まさか、まさかで!! どうして佐藤さん!?)

車に乗り込んだのはいいが、どうしても緊張してしまう。

やっぱり金本スイーツ近くの駅に降ろしてもらえばよかった。今更嘆いてもすでに遅い。

次々に車は発車していき、ふと我に返れば佐藤さんの車が最後尾となってしまった。

彼はトランクに荷物を積み込み終わったようで、運転席に乗り込んでくる。

その瞬間、ドクンと心臓が跳ね上がった。

車内に二人きり。それも相手は男性で、今日一日で憧れから苦手意識へ変わってしまった佐藤さんだ。

(やだ、どうしよう……)

緊張で手に汗が滲んでしまう。

一人焦っていたせいで、佐藤さんが話しかけてきたことに気がつかなかった。

「……ろ。……シートベルト」

「へ？」

ハッと平静に戻ると、運転席に座った佐藤さんが訝しげに眉を顰めている。

「大丈夫か？ 俺の話、聞いていたか？」

「え？ え？」

目を丸くして慌てまくる私に、佐藤さんはため息をついた。

「これから帰るから。きちんとシートベルトして」

「あ……はい、すみません」

どうやら佐藤さんは何度も私に話しかけていたようだ。申し訳なくて頭を下げたあと、急いでシートベルトをつける。

「シートベルト、しました」

ばつが悪くて小声で呟くと、「ん」と一言だけ返事をして佐藤さんは車のエンジンをかけた。

五月下旬、ここ最近はず夏を彷彿させるような暑い日が続いている。

今日のデイキャンプも、日差しが強くて暑かった。フロントガラスに照りつける太陽は、だいぶ弱まってきたが、空はまだ明るい。目を細めて外の様子を見ると、佐藤さんの男らしい手が伸びてくる。

一瞬私に近づくのかと鼓動が大きくなったが、彼はエアコンの温度調節ボタンを押したただけだった。

私ったら、何を慌てているのだろう。

佐藤さんの言動一つ一つが私の心を乱していく。

そうかと思えば、キャンプ中の怖いイメージを思い出し、どうしても気まづくなってしまう。

車はゆっくりと発進してキャンプ場を出る。佐藤さんの運転はとてもスムーズで、カーブを曲がっても身体が極端に傾くことはない。

運転が上手だな、と思いながら流れる景色を見つめていると、佐藤さんが口を開いた。

「アンタ、デイキャンプとかって初めて？」

「え？」

彼から話しかけてくるとは思っていなかったから、返事が遅れた。
佐藤さんは正面を見て運転したまま、心配そうに声をかけてくる。

「眠いか？ もし、眠くなったら寝ていいぞ」

「い、いえ。大丈夫です。……えっと？」

「デイキャンプ。慣れていない感じだったけど？」

「ああ、はい。初めてでした」

正直に頷くと、佐藤さんは真面目な口調で言う。

「だろうな。アウトドアはさ、アンタみたいにボーッとしていると危険なことが多いんだから。気をつけろよ」

「っ！」

ムツとして口を歪ませたが、それを慌てて隠した。

相手は取引先の人間で、直接仕事に関わってくる相手だ。大人の態度を取ろう。

だが、どうやら私の不愉快な気持ちは佐藤さんに伝わってしまったようだ。

運転席からフツツと楽しげな笑い声が聞こえる。

（今、佐藤さんが笑った……？）

今日一日、私を見るたびに仏頂面になっていたのに、今は確かに笑った、と思う。

信じられなくて隣に視線を向けると、佐藤さんは前を見据えたまま口を開いた。

「アンタ、電話での雰囲気と違うよな。もっと、しっかりしているかと思ったけど、実際はマヌケ

だな」

「な……！」

衝撃的すぎて言葉が出ない。唇を戦慄かせて驚く私に、佐藤さんはクツクツと肩を震わせて意地悪そうに笑っている。

さすがにこれは頭に来た。

（誰だ、目の前の男が優しくて紳士的な王子様だつて言っていたヤツは！）

私は先ほどまで必死に抑えていた感情を爆発させた。

「それは、こっちの台詞です！」

全くなんだつて言うんだ、この男は。紳士とはかけ離れすぎている！

やっぱり今日のデイキャンプに参加しなければよかった。佐藤さんへの憧れは、憧れのままにしておけばよかったのだ。

しかし、今更嘆いてもすでに遅い。

私は佐藤さんから顔を背け、流れる景色を見続けた。

心の中は怒りと失望と……とにかく色々な感情が入り混じっている。

マンションの最寄り駅に着くまでの一時間、私たちは一言もしゃべることはなかった。

やっと駅前に着くと、ドツと疲れが出てくる。もうこれ以上、この陰湿な雰囲気にな身を置きたくない。

駅前のロータリーに車が横付けされると、私は慌ててシートベルトを外した。

「ここまで、ありがとうございました」

カバンを引っ掴んでドアを開くと、お礼もそこに車から降りる。

佐藤さんの顔も見ず、そして返事も何も聞かず、逃げるようにその場を走ってあとにしたのだった。

第二章

デイキャンプから一週間が経とうとしていた。

あれから私は気分が乗らず、未だにショックを抱えて過ごしている。

デイキャンプに誘われたときに感じた迷いは、私への忠告だったのかもしれない。

電話で話すときと、実際の本人とのギャップは確かに存在する。わかっていたつもりだったけど、佐藤さんだけは違々と、何故か信じていたのだ。

もし過去に戻るのなら、デイキャンプには行かず、佐藤さんへの想いは憧れのままにしておくだろう。今更何を言っても遅過ぎるけど。

私は手元にある受注書を見て、大きくため息をついた。

今日は金曜日、時間はお昼休憩少し前だ。A M B コーポレーションに電話をしなければならぬ。それがまた、私の気分を憂鬱ゆううつなものにしていく。

これまでの私なら「今からご褒美タイムだ！」と喜び勇いそんで電話をかけ、佐藤さんをお願いしていただろう。

受話器から聞こえてくる優しく紳士的な佐藤さんの声が、私は大好きだった。

だけど、もうあのとときめきを感じることはできない。だからこそ落胆らくたんしているのだ。

ああ、佐藤さんに電話をかけたくはないけど、これは仕事だ。社会人として、やるべきことはやらなければならない。

私は心の中で気合いを入れて、受話器を手にボタンをブッシュする。いつものように取り次ぎを依頼し、保留メモディーを聞く。

（そういえば、デイキャンプのお礼を言うべきかな。だけど、仕事中のだしプライベートのことは話さない方がいいのかも。でも……）

そんなことを考えていると、聞きたくなかった声が聞こえてきた。

『お待たせいたしました、佐藤です』

「い、いつもお世話になっております。金本スイツ、吉岡です」

どうすべきか迷っている間に佐藤さんが電話に出たので、慌て過ぎて声がうわずってしまった。いつもと明らかに様子が違う私に、佐藤さんは気がついていいるだろう。

だけど、電話口の彼は、今まで通りの優しく紳士的な王子様そのものだった。

『こちらこそお世話になっております。早速注文の方、いいですか？』

「はい。どうぞ」

気持ちを切り替えて、佐藤さんの声に耳を澄ます。

抜け落ちがないよう集中して書き込んでいき、すべての記入を終えた私は佐藤さんにお礼の言葉を言った。

いつもならこれで終わりだ。そして、「また来週、この時間にお電話させていただきます」とい

う定型文を口にして受話器を置けば、ミッションクリアになる。

だが、今日はいつもととは違っていた。

『あ、それと……この前ファックスしていただいた注文書のことでお聞きしたいことがありまして。商品番号が、NEB5937のクリームブリュレが入っているのですが……』

「はい。こちら毎年この時期にご注文いただいておりますので、今年も是非ご検討いただきたいと思い、送らせていただきました」

この商品、普段はAMBコーポレーションと取引をしていない。

だけど、過去の注文履歴を遡^{さかのぼ}って見てみると、毎年この時期に一回だけ注文を受けていたのだ。

だから、今年も発注が来るのではないかと思い、佐藤さんに頼まれる前にファックスしておいたのだが……。もしかしたら、差し出がましかっただろうか。

最悪のことを想像しながら受話器を握り締めていると、佐藤さんは柔らかな声で言った。

『そうだったんですね、助かりました』

「え？」

驚いて声を上げる私に、彼は軽やかに笑う。

『実は、この時期にだけクリームブリュレを卸^{おろ}してほしいと言う業者さんがいるのですが、お恥^はずかしい話、すっかり忘れてしまっていたのです。吉岡さんのおかげで見落^{おとし}とせず済みました』

『ありがとうございます』と佐藤さんに感謝され、私の胸はこれ以上ないほど高揚してしまう。

デイキャンプでの一件で佐藤さんのイメージが脆^{もろ}くも崩れてしまったわけだが、こうして仕事ぶ

りを褒められるのは嬉しい。

「いえ、お役に立ててよかったです」

『本当に助かりました。ありがとうございます』

相変わらず電話での佐藤さんは、とても優しく紳士的だ。それに胸がキュンキュンしてしまうほどいい声で、腰の辺りがモゾモゾする。

こうなってくると、本物の佐藤さんだって、もう少し思いやりがある言い方をしてくれればいいのにも思ってしまう。あんなに心地悪な感じでは、この美声がもったいない。

いや、本物も二セモノもないか。電話での佐藤さんだって、プライベートの佐藤さんだって、同じ人物なのだから。

心の中で愚痴^{ぐち}りながら、「いえ、それでは」と電話を切ろうとする私に、佐藤さんは慌てた様子で『ちょっと待って』と声をかけてきた。そして、小声で囁^{ささや}く。

『服。穴、開かなかったか？』

「え？」

なんのことだろうか。佐藤さんが言った意味がわからず、顎^{あご}に手を当てる。

色々と考えを巡らせていると、電話口から小さく息を吐き出した音が聞こえた。

呆^{だま}れたのだろうか。だけど、意味がわからないのだから仕方がない。

『大丈夫ならいい』

素^そっ気^けなく言ったあと、佐藤さんはいつもの口調に戻る。

『では、失礼いたします』

「あ、はい」

ツーツーと電子音が響く。

私はその音を聞きながら、受話器を置くこともせずに再び考え込んだ。

佐藤さんは、一体何を聞きたかったのか。穴が開かなかったかと言っていたが、どういう意味なのだろう。

首を傾げながら、やっと受話器を置いた。

それと同時に、大事なことを思い出す。佐藤さんから借りたウインドブレーカーのことだ。

洗ってから返そうと思っていたのだが、考えてみればどうやって返せばいいのだろう。

渡部さんがA M Bコーポレーションに行く際にお願^{ねが}いするべきだろうか。でも、無理矢理渡されたとはいえ、日焼けを防ぐために貸してくれたのだ。キチンとお礼を言いたい。

本当は帰り際にお礼を言っ^つて「このウインドブレーカーは洗ってお返しします。渡部さん経由でも大丈夫でしょうか？」と確認を取ろうと思っていた。

だが、車中のショッキングな出来事のせいで、頭の中からすっかり抜け落ちていたのだ。

さて、どうしたものか。ビジネスマンの佐藤さんに連絡したければ、A M Bコーポレーションに電話をすればいいが、プライベートの佐藤さんにはどう連絡したらいいのかわからない。

ここはやっぱり渡部さんをお願いするしかないだろう。

私は昼休憩に入ったのを見計らって、渡部さんに相談することにした。

ついでに、先ほどのやりとりを一部始終話し、佐藤さんの言葉の意味も尋ねてみた。すると、渡部さんは何かを思いついたように「ああ!」と手を叩く。

「そりゃあ、吉岡が火元にいたからさ。佐藤さんは慌てて避難させたんだよ」

「避難、ですか? どういうことです? 確かに火元は危なかったかもしれないですけど」

未だによくわかっていない私に、渡部さんはニツと意味ありげに笑う。

「だって、服に穴が開かなかつたかつて聞かれたんだろう?」

「はい」

私が神妙な顔つきで頷くと、渡部さんは急に真剣な面持ちになった。

「焼き炭^{すす}つてさ、結構爆^はぜるんだよ」

「爆^はぜる?」

「そう。しかもデイキャンプの前日、雨が降ったから湿気がすごかつただろう? 水分を含んだ炭を加熱すると、水蒸気によって余計に爆^はぜるわけ」

「そうなんですか?」

湿っていると火が付きにくくなるというのはなんとなく想像できるが、爆^はぜやすいというのは初耳だった。

感心して頷いていると、渡部さんはニンマリと意味ありげに口角を上げる。

「吉岡さ、気合い入れて可愛い服着ていたじゃん。火の粉が服について穴が開いたら大変だと、佐藤さんは思ったんじゃない?」

「え?」

「だから、佐藤さんは心配して吉岡を火元から遠ざけたんだよ」

「……」

渡部さんは黙りこくる私を見つつ、言葉を続ける。

「そういえばあのとき、佐藤さんが血相^{けつそう}変えて吉岡のところに飛んでいったんだよ。そういうことかあ」

戸惑っている私に、渡部さんは優しく諭^{さと}す。

「前にさ、接待で佐藤さんと呑む機会があつたんだけど、男っぽくてすげえいい人だったよ。ただ、ちよつとシャイなところはあるかもしれないけどさ」

渡部さんはチラッと私に視線を投げかけてくる。

それに気がついたけど、私は情けない思いを抑えるのに必死だ。

理想の佐藤さん像を勝手に作り上げた挙句、イメージと違ったからとショックを受け、失礼な態度を取ってしまった。なんて大人気ないのだろう。

依然^{いぜん}黙りこくっている私に、渡部さんはため息混じりに言った。

「吉岡が言うような王子様みたいな人じゃないけど、頼りがいのある男らしい人だよ。ウインドブレーカーは吉岡が直接返しな」

「そう、ですね」

その一言を言うのが精一杯だった。

あのキツイ言葉の裏に隠された、佐藤さんの優しさ。それを今更わかつて遅い。

あの日、あのときにお礼を言うべきだった。

私の気持ちを酌^くんでくれたのだろう。渡部さんは、私の肩をポンポンと叩くと、何も言わずにその場をあとにした。

残された私は自席に戻ってデスクに肘をつき、頭を抱えた。

優しさ。それが電話の佐藤さんにも、プライベートの佐藤さんにも共通していることは、あのデイキャンプの日にわかっていたのに……

渡部さんに指摘され、罪悪感が押し寄せてきた。

来週電話をするとき、それとなくデイキャンプの話題を出して謝ろうか。だけど、仕事中にプライベートな話はしにくいし……

どうしたらいいものか、と悩んでいた私に、思いがけず再び佐藤さんと会うチャンスが巡ってきたのだった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

六月に入って初めての日曜日。私は、最近できたばかりの結婚式場に来ていた。姉のハレの日だからだ。

ジューンブライドに憧れていた姉は、今日の良き日に、三年間付き合っていた恋人とめでたく結

婚式を挙げた。

式は滞^{とど}りなく終了し、次に披露宴会場へと場所を変えたとき、私は「ある人物」の姿を見つけた。

本日はお日柄もよく——そんな常套句^{じょうそうぐ}で始まるスピーチが行われているが、申し訳ないことに内容^{内容}は全然頭に入っていない。

私の視線は、新郎友人席にいる「ある人物」に注^{そそ}がれている。

（佐藤さん……お義兄^{にい}さんのお友達^{ともだち}だったんだ）

今日のために新調したパーティードレスの裾^{すそ}をギュッと握り締め、私は佐藤さんをまっすぐに見つめる。

こちらを見ないかな、そんなふうに思いつつも、本当に佐藤さんが私の存在に気がついたときにどんな対応をしているのかわからない。

それにしても、こんな身近なところで繋がりがあったなんてビックリだ。世間は狭いと言うけど、本当だなあと改めて実感する。

「あ……!!」

あまりにジッと見過ぎてしまったせいかな、佐藤さんがこちらに目を向けた。

彼も私に気がついたらしく、ビックリしたような表情を見せる。

しかし、すぐに佐藤さんは友人たちに連れられ、ひな壇の方へと歩いて行ってしまった。

新郎新婦たちに、お祝いの言葉を言っているのだろう。

彼らの様子を見ると、仲がいいことがわかる。

姉も佐藤さんを知っているようで、とても和やかに話していた。それが、どうしてか癪に障る。

(佐藤さん、私とお姉ちゃんとは態度が違う気がする！)

私の身近な人間が佐藤さんを知っていたという事実が衝撃的で、どこか嫉妬めいたものを感じてしまう。

姉の方が、佐藤さんに近いところにいたことが面白くない。なんだか、とっても面白くない。

目の前に運ばれたステーキをナイフで切りながら、どうしてもイライラが隠せずにいる。

どうしてそんなに苛ついているのか。それがわからないからこそ、ますます苛立つてしまうのだ。なのに、依然として私の意識は佐藤さんに向けられているのだから、救いようがない。

だが、ふと我に返る。これはチャンスじゃないだろうか。

デイキャンプでのことを謝罪したいと思っていたし、ウインドブレーカーも返したい。なんとかしなくてはいけないと悩んでいたところに、チャンスが巡ってきたのだ。

披露宴が終わったら、なんとしてでも佐藤さんを捕まえて、話をしよう。

その考えに至った途端、今度はドキドキと胸の鼓動が速くなり、緊張し始めてしまった。

身体が感情に素直過ぎて、自嘲してしまう。

そのあとは幸せいっぱいの新郎新婦を遠くの席で見守り続け、披露宴は無事に終了した。

「いいお式だった」と列席者たちが口々に言いながら出口へと向かっていく。

私も慌てて席を立ち、すでに出口付近まで歩いて行ってしまった佐藤さんを追いかけた。

だが、一斉に列席者たちが動き出したため、なかなか披露宴会場から出ることができない。

やっとの思いで出たものの、人でごった返すフロアではなかなか佐藤さんを見つけれなかった。

このまま見失ってしまったらどうしよう。そんな不安を抱えながら辺りをキョロキョロと見回している、やっと彼の背中を見つける。

話をするなら今しかない。私は勇気を振り絞って名前を呼んだ。

「あの！ 佐藤さん！」

私が声をかけると、佐藤さんの周りにいた男性たちが一斉に振り向く。

驚いて立ち尽くす私に、彼らは近づいてくる。

「もしかして、吉岡ちゃんの妹さん？」

「あ、はい……」

見知らぬ男性たちに囲まれてしまい、戸惑いを隠せない。

用があるのは佐藤さんだけなのに、どうしてその周りにいた人たちが反応してしまったのか。それに、肝心の佐藤さんが見えなくなってしまった。

どうにか抜け出そうとする私に、彼らは次々に話しかけてくる。

「これから二次会なんだよ。一緒にどう？」

「なあ、吉岡ちゃん。妹ちゃん、連れて行ってもいいだろう？」

盛り上がる面々に私はタジタジだ。

近くにいた姉に救いを求めるが、ニマニマと笑っているばかりで、助けてくれそうにない。

私がパニックっている状況を面白がっているのだ。

(あとで覚えておけ！)

恨みがましい視線を姉に送っていると、周りの男性たちは私の背中を押して促し始める。さすがに遠慮しようと口を開いたとき、誰かに腕を掴まれた。

驚いてその人物を見て、また驚く。佐藤さんだったのだ。

「アンタは、俺に用事があるんだろう？」

「あ……えっと……」

急な展開に頭が真っ白になってしまった。

答えにならない言葉を紡ぐだけで、肝心なことは何一つ言えない。

何度も瞬きをして彼を見つめていると、佐藤さんは私の腕を掴んだままフロアを闊歩し始めた。

「ちょ、ちよっと佐藤さん!？」

慌てた私の耳に飛び込んできたのは、私を二次会に誘ってきた男性陣のブーイングだ。

だが、佐藤さんはそれを無視して、私を式場の外へと連れ出した。

そこはガーデンパーティーをするスペースのようだが、今朝雨が降っていたので足元が悪く、使われていない。

いつの間にかすっかり雨も上がり、晴れ間が見えている。葉に残る水滴に光が反射し、緑がキラキラと輝いて見えた。

今、この庭園には誰もいない。佐藤さんと二人きりという状況に、私はすでにパニック状態だ。

なのに、目の前の佐藤さんは落ち着いている。

私一人でテンパっているのが恥ずかしくて、ギョツとドレスの裾を握り締めた。

デイキャンプのときの謝罪をしたい、ウインドブレーカーの礼を言って返したい。そう、心から願っていたはずだ。

それなのに、いざ本人を目の前になると、言葉がうまく出てこない。

ふと、自分の右腕に目を落とす。未だに佐藤さんは私の腕を掴んだままだ。

チラリと彼に視線を向けて、やつぱり格好いいと見惚れてしまう。

今日の佐藤さんはネイビーのスーツを着ていた。ネクタイとハンカチーフはオフホワイト、その刺繍や織り目がとてもキレイでセンスがいい。

容姿もよくて声もいい。優しくて……その上、男の色気もあって、心臓はドキドキしっぱなしだ。

私は佐藤さんの腕を振り払うことができず、ただジッと彼の手を見つめる。

男らしい手だ。そこから伝わるぬくもりを感じ、身体が何故か火照ってしまった。

挙動不審な私を尻目に、佐藤さんは話しかけてくる。

「で？ どうした？」

佐藤さんはやっと腕を放してくれたが、私はぬくもりが遠のいてしまうことを寂しく感じた。

そこでハッと我に返る。私には言うべきことがあるのだ。

慌てて取り繕い、コホンと一つ咳払いをする。グツと手を握り締めたあと、私は佐藤さんに勢よく頭を下げた。

「この前は、すみませんでした」
「……」

沈黙が苦しい。あまりに無反応なので恐る恐る顔を上げてみると、佐藤さんは目を見開いて驚いていた。

なんのことだかわからないといった様子の彼に、私は慌てて説明をする。

「えっと、あの……この前のデイキャンプのとき、火元でボーツとしていた私を守ってくれたのに、お礼も言わなかったから！」

「ごめんなさい」ともう一度頭を下げると、先ほどまで驚いて固まっていた佐藤さんが私から視線を逸らして呟く。

「いや……。俺も言い方キツかったから……」

「……っ！」

話し方はぶっきらぼうだったが、内容は優しい。私への気遣いが感じられた。

声もいつものようにフェロモンダ漏れな感じではなく、照れているのがわかる。

何よりも一番私が驚いたのは、彼の頬が赤く染まっていたことだ。

デイキャンプ時の佐藤さんは素っ気ない感じだったのに、今は頬を染めて照れているなんて。

(可愛い!! すごく可愛い!)

彼らしくないからこそ、意外な一面に胸がキュンキュンしてしまう。

面と向かって佐藤さんに言ったら、絶対に顔を歪めて怒るに違いないから口には出さないけど、

可愛いものは可愛い。

ギャップ萌えというヤツだろうか。何度も胸がキュンと鳴いてしまう。

今までは電話での佐藤さんしか知らなかった。けれど、デイキャンプでプライベートの姿を知り、今日また彼の違う一面を垣間見て――

もっともつと彼のことを知りたい。突然、そんな欲求が込み上げてくる。

佐藤さんは照れを隠すように咳払いをして、話を切り替えた。

「そういえば、この前のデイキャンプ、楽しかったか？」

「はい！」

私は大きく頷いたあと、あの日のことを思い出す。

佐藤さんのギャップにショックを受けていたが、デイキャンプ自体は楽しかった。

「すごく楽しかったです。いい天気すぎて暑いぐらいでしたけど……でも、自然の中で食べるご飯ってなんであんなに美味しいんでしょうね！ 小学校の遠足を思い出しました」

「フツ……遠足前には興奮して眠れないタイプだっただろう？」

「うっ、どうしてそれを」

正直に答える私を見て、佐藤さんは声を上げて笑い出した。

(すごく優しい瞳で笑うんだ、この人)

それに気づいて、胸がいつぱいになり言葉が出てこない。

楽しみに笑っていた佐藤さんだったが、ふと笑いを引っ込めて私を見つめてきた。

まっすぐな視線に熱が込められている気がして、私の胸がドクンと大きな音を立てる。
キュッとドレスの裾^{すそ}を握り締めていると、佐藤さんが口を開いた。

「デイキャンプ、また行きたいか？」

「はい。また行けるなら行ってみたいです！」

もし再び行けるなら、今度はもう少しゆったりとした時間を楽しみたい。

前回はバーベキューをしたのだが、デイキャンプというのはまだまだ楽しみ方がありそうな気がする。

ワクワクしながら頷く私に、佐藤さんは優しげに目尻を下げた。

「じゃあ、今度、二人で行ってみないか？」

「え……？」

「デイキャンプ」

「ええっ！」

まさか、まさかのお誘いに目が丸くなってしまふ。

目を何度もパチパチと瞬^{しげ}かせていると、佐藤さんは私の顔を覗き込んできた。

その瞳は「どうする？」と問いかけてきているように見える。

嬉しすぎて声が出ない私は、慌てて何度も首を縦に振った。

そんな私を見て佐藤さんは眉を顰^{ひそ}め、「きちんと言葉にしてくれ」と訴えてくる。

「行きたいです……佐藤さんとデイキャンプ！」

つい大きな声で叫んでしまい、恥ずかしくて逃げ出したくなる。

（どうしよう、私、かなりがつついていない？ 佐藤さん、引いちゃったかも！）

自分でも何がなんだかわからない状態になってしまっている。

（佐藤さん、お願いだから何か返してください……！）

懇^{こん}願に近い気持ちで佐藤さんを見上げると、彼は目尻を下げて柔らかに笑っていた。

「アンタって、電話のときの印象とは違うよな。デイキャンプのときにも思ったけど」

「そ、それは……仕事ですから。でも、そう言う佐藤さんだって全然違いますよ！」

「ハハハ。そういうば、帰りの車でもそんな話をしたよな」

クツクツと肩を震わせ笑う佐藤さん。私は、彼の笑顔に釘付けになってしまった。

デイキャンプのとき、佐藤さんが私に向ける表情はしかめっ面ばかりで、笑顔なんて見せてくれなかった。

今にして思えば、あのときの佐藤さんは私のことを心配していたのだろう。だからこそのかめっ面だったのかもしれないが、今は笑いかけてくれることが嬉しい。

飛び上がった喜んでしまいそうなほどだ。

ひとしきり笑った佐藤さんは、スーツのジャケットからスマホを取り出して画面を見せてくる。

覗き込むと、通話アプリの画面だった。私も使っているアプリだ。

「このアプリ、やっている？」

「あ、はい」

コクコクと何度も頷き、クラッチバッグからスマホを取り出して連絡先を交換する。
佐藤さんの連絡先をゲットできたことが嬉しくて、思わず心が弾んでしまう。

嬉々としてスマホの画面を見つめていたが、大事なことを思い出した。ウインドブレーカーのことだ。

「佐藤さん、ウインドブレーカー、いつお返しすればいいですか？」

「そうだな……。今度、デイキャンプに行くときでいい」

「は、はい……！」

佐藤さんは社交辞令ではなく、本気で私をデイキャンプに連れて行ってくれるようだ。すぐ嬉しくて浮き足だっている私に、佐藤さんは表情を曇らせた。

「デイキャンプにアンタを誘うつもりではいるんだが……」

「な、何か問題が？」

やっぱりその場の勢いで口を滑らせただけなのだろうか。

深刻そうな表情を浮かべる彼を見て、私は固唾を呑む。

「この前みたいな格好じゃあ、ダメだな。連れて行けない」

「あ……」

確かにあのときの服装はアウトドア向きではなかったかもしれない。

佐藤さんがウインドブレーカーを貸してくれたのだって、それが原因だ。

ダメ出しされても仕方がない格好だったことは否めない。

どうしよう、と佐藤さんに視線を向けると、彼は腕を組んで頷く。

「デイキャンプに行く前に、色々予習しておくか？」

「え？」

「アウトドアシヨップ、興味ある？」

「あります！ 連れて行ってください！」

「よし、じゃあ今度一緒に行くか」

その言葉通り、佐藤さんはその日のうちに連絡をくれて、アウトドアシヨップに行く日にちが決まる。

トントントン拍子に進むことに驚きを隠せないが、急速に佐藤さんとの距離が縮まっていく気がして嬉しかった。

翌週の金曜日の夜。

「明日は休みだからゆっくりできるだろう」という佐藤さんの案で、今日アウトドアシヨップに行くことになった。

佐藤さん行きつけのお店が金本スイーツの最寄り駅付近にあるということで、駅の改札で待ち合わせをする。

ソワソワしながら待っていると、ホームから人が流れてきた。

この人混みの中に佐藤さんはいるのだろうか。

キョロキョロと改札を抜ける人たちを見てみると、探していた人物のシルエットが見えた。

「佐藤さん！」

思わず大きな声で呼んでしまい、慌てて口に手を当てる。

恥ずかしさで頬を熱くさせる私の前に、佐藤さんが立った。

「悪い。待たせたな」

「っ！」

初めて佐藤さんを見たときにも、格好いい人だと思った。

あめときは黒のボロシャツにスリムなカーゴパンツというラフな装いで、ワイルドな風貌にとても似合っていたことを思い出す。

でも、今日の佐藤さんは仕事終わりということでスーツ姿だ。

濃いグレーの細身のスーツに薄いブルーのシャツ、そしてネクタイは濃紺のうこんの格子柄こうしがら。

清潔感あふれる装いだが、どこか妖しげな色気を感じる。

姉の結婚式でも佐藤さんのスーツ姿を見たが、やっぱりステキだ。

きっとA M Bコーポレーションの女性社員たちから、熱い視線をしょつちゅう注がれていることだろう。

何故か心の中がモヤモヤして、どうしたものかと思悩む。すると、佐藤さんは腰を曲げて私の顔を覗き込んできた。

彼との距離が急に近くなり、私の身体は驚きのあまりピョコンと跳ねる。

「どうした？」

「い、いや……なんでもありませんよ？ えっと、その……とにかくお店に行きましょう！」

話を逸らした私を面白そうに見ていた佐藤さんは、目元に笑みを浮かべる。

「そうだな、行こう」

「はい！」

佐藤さんに案内してもらってアウトドアショップへと向かう。お店は駅から歩いて五分程度の場合にあり、とても近くてビックリした。

こんな近くにあったのに、私はその存在すら知らなかったのだ。

それだけアウトドアに関して興味がなかったということなのだろう。

新境地と言っても過言ではないからこそ、踏み入れていい世界なのか躊躇ちゅうちよしそうになる。

だけど、何事も経験だと思って、お店の中へ入っていく。

「まずは、服だな」

「はい……って、色々あるんですね！」

店内にはアウターにトップス、ボトムスと、色々なデザインのもがオシャレに展示されていた。色も豊富で目移りしてしまう。

「あ、これなんて可愛い！」

気になったものを片っ端から手に取ってみる。ショートパンツにレギンスを合わせるのも可愛い

し、このリネンシャツも肌触りがいい。クロップドパンツは動きやすそうだ。アウトドアだけでなく普段使いにもできそうなくらい、デザイン性が高い。

「これだとUVカットもついているし、吸湿性にも速乾性にも優れているから快適だ」
「へえ」

感心してあれこれ見ていると、ウインドブレーカーを見つける。

身体に当ててみながら、佐藤さんを振り返った。

「これって佐藤さんが貸してくれたウインドブレーカーの色違いですよ？」

「ああ、そうだな。でもそれは今年の春モデルだ。俺のは数年前に買ったヤツだから」

「そうなんですね」

「防風、防水加工もしてあるし、体温調節するには、ウインドブレーカーは必需品だな」

「へえ。じゃあ佐藤さんと同じのを買おうかなあ」

他の服も気になったが、このラインナップを見る限り、クロゼットの中にある服で代用できる。だけど、こういったウインドブレーカーは一着も持っていないから、手元があれば何かと重宝しそうだ。

それに、佐藤さんとお揃いのブランドだと思いと、嬉しくてウキウキしてしまう。

「形から入るタイプだな、アンタ」

「形だつて大切です！」

むきになってふてくされる私に、佐藤さんは目尻を下げて破顔する。

「いいんじゃないか？ 好きになる入り口はさ、人それぞれだから」

「っ！」

ドクンと大きく胸が鳴る。顔がジワジワと熱くなっていくのが、自分でもよくわかった。

私は誤魔化すように咳払いをしたあと、店の奥を指さした。

「あっちにある機械は何に使うんですか？」

「ああ。あれは調理器具だな。見るか？」

「はい！」

大きく頷いて店の奥へと歩を進める。私は佐藤さんの後ろに回り、こっそりと自分の頬に手を当てた。

顔が真っ赤になっていることに、どうか佐藤さんが気づきませんように。

そんなことを祈りながら、私は見たことがないアウトドアグッズに視線を移した。

* * *

（つた。無駄に可愛いんだよな、彼女）

ふと手を止め、俺——佐藤亮哉は先日のアウトドアショップでの出来事を思い出す。

彼女に貸したウインドブレーカーと同じブランドの物を身体に当て、『これって佐藤さんが貸してくれたウインドブレーカーの色違いですよ？』と言ったときの彼女の笑顔はとても可愛かった。